学習院大学研究叢書 28

ジョン・スタインベック文学の研究

稲葉 秀太 著

江苏工业学院图书馆
藏书章

学 習 院 大 学

——本叢書の第1～9巻は学習院学術研究叢書の名で既刊——

稲澤秀夫（いなざわ・ひでお）
昭和三年（一九二八年）千葉県生れ
学習院大学文学部英米文学科教授
主な著書
『スタインベックの世界』（思潮社）
『トルーマン・カポーティ研究』（南雲堂）
『アメリカ女流作家論』（審美社）
『谷崎潤一郎の世界』（思潮社）
『聞書谷崎潤一郎』（思潮社）
『ふるさとの言葉』（流山わがまち社）
『下総、ことばの風土』（崙書房）
『祕本谷崎潤一郎』全五巻（鳥有堂）
『折々の記』限定版（巻五まで刊行、以下続刊）

現住所　〒二七〇―〇一
千葉県流山市松ヶ丘四丁目五二〇番地の六〇

学習院大学研究叢書28
ジョン・スタインベック文学の研究

平成7年12月15日発行

著者　稲澤秀夫

発行者　学習院大学
171　東京都豊島区目白1丁目5番1号
電話　03-3986―0221（代表）

発行兼印刷所　第一法規出版株式会社
107　東京都港区南青山2丁目11番17号
電話　03-3404―2251（大代表）

© 1995, Printed in Japan

目　次

一　スタインベック文学の出発――異神を求めて……1
二　短篇物語「朝食」をどう読むか……14
三　『怒の葡萄』第二十二章の研究……32
四　『怒の葡萄』第三章の研究……60
五　妊婦の微笑について……95
六　脱落者の意味について……113
七　「日記」から見た『怒の葡萄』……130
八　『彼らの血は強い』から見た『怒の葡萄』……143
九　ストライキ小説としての『怒の葡萄』……153
十　柳と水……162

十一　満たされざる女たち……177
一、「蛇」……177／二、「菊」……184／三、「白いうずら」「肩当て」……190
十二　『奇怪なものなんて何もない』をめぐって……199
十三　『赤い小馬』の考察……207
十四　『はつかねずみと人間』をめぐって……240
十五　『鑵詰横町』の考察……255
十六　繁栄の中の喪失を見つめつつ……271
十七　再考『エデンの東』……283
十八　英雄譚遍歴……299
十九　従軍記……314
二十　旅、そして文明批評……326
二十一　手紙から見たジョン・スタインベック……335
二十二　研究書評……349
あとがき……375

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　スタインベック文学の出発——異神を求めて

ある一人の小説家や詩人が先々どのような展開を示して行くかは、その作家の第一作に表れているとよく言われている。これは、第一作に籠められた意慾とか研鑽ということだけでなく、おのれの内部に在りながら、自分でも分明でない事、自分でも自覚的で無い事までが、必然的に最初の作品に現れてしまうということである。

ジョン・スタインベック John Steinbeck（一九〇二—一九六八）文学を考察するにあたって、第一作に相当する作品は何かと言えば、出版の年代順だけで言えば、一九二九年の『金の杯』*Cup of Gold* が最初に来る。この作品は、そこにある空想の要素からして、それなりに後々のスタインベック文学の一面を備えてはいる。(1)

然し、スタインベック・カントリーという言葉が今日広く認められ、定着していることからも明らかなように、スタインベック文学の故郷は何と言ってもカリフォルニア州の一角にあり、ここがスタインベック文学を育てた土壌であることは疑い無い。この作家が何を書こうとも、その淵源を辿りに辿って行けば、いずれはここカリフォルニアへ辿り着く。

このような点から見ると、この作家の誕生と将来をよく表している作品は、『金の杯』よりも、第三作、一九三三年の『知られざる神に捧ぐ』*To a God Unknown* である。

この作品の舞台はヌエストラ・セニョーラという仮想の地であるが、それはカリフォルニア州に設定されてい

るばかりか、作品に籠められている素材から感性主題にいたるまで、まさにスタインベック文学の誕生、出発点と呼ぶにふさわしい。

この作品は、『金の杯』よりも早いある時期から習作されていたことが、ピーター・リスカ[2]やジャクソン・ベンソン[3]により報告されている。

今日 The Green Lady と仮称されているこの習作は、その後、書き変えを重ねられ、最終的には、現に我々が目にする作品へと仕上げられた。

それは誕生までに実に長い経歴を持ち、もし順調に書き上げられていたら、第一作になったかもしれない作品だった。スタインベック文学になじんだ者であれば、それが、一方では充実した作品でありながら、他方では、文章に、特に物語の初のほうの文章に生硬な部分があるところから判断して、作家の未開花の頃の作品であるということを見抜くことが出来る。充実と生硬というこの奇妙な同居の中に、早くから手をつけながらも、模索し続けるほかなかった無名作家の苦闘が刻まれている。

スタインベックの生涯を徹底して調査したジャクソン・ベンソンは、後年のスタインベック文学の特徴が、ここに極めて露に出ていることを記している。[4]

『知られざる神に捧ぐ』にスタインベックらしさを求めるとすれば、それは何だろうか。

特徴は幾つも出ているが、ここでは特に、二元論、樹木信仰、限りない交媾を求めての三点に問題を絞り、終生この作家の中にあった異神の性質について考えてみることにする。

ジョン・スタインベックにある二元論は、早期のこの作品に既に明白に現れている。

作品名になった To a God Unknown という言葉は、一見したところでは『使徒行伝』第十七章第二十三節の TO THE UNKNOWN GOD をもじったものであるかに映る。

使徒パウロがアテネの人々にキリストの道を述べ伝えようと伝導の旅にあった時、アテネの人々は「手で造った宮」を拝んでいた。「神は天地の主であるのだから、」そのような祭壇に住む筈はないとパウロは説く。これに対し、異神を信じていたアテネの人々は、「死人のよみがえりのことを聞くと、ある者たちはあざ笑い」、また、ある者たちは「この事については、いずれまた聞くことにする」と言って、パウロの言うことをすぐ受け容れた者は少なかった、と記されている。

スタインベック自身は、一九三三年一月三日のロバート・オー・バルー宛の手紙で、この題名はパウロの知られざる神から取ったのではなく、ベーダの讃歌から取ったものであると述べ、「アンノウン」は「アンエクスプロアド」の意味だと解説している。[5]『知られざる神に捧ぐ』の冒頭に引用されている詩は、バラモン教の最古の聖典『リグ・ベーダ』にある宇宙創造の讃歌ヒラヌヤ・ガルバ（黄金の胎児）の歌である。ところが、スタインベックが引用しているこの詩は、原詩のままではない。引用してある詩では、原詩の一節と十節を省いてあるばかりか、原詩に読みこまれている神の名前が、英語訳詩では省略されてしまっている。原詩の神は、決して「知られざる神」などではない。それにも拘わらず、作者は神を文字通り不特定の知られざる神に仕立ててしまっている。

これは、作者の使用した英語訳詩が原詩の神の名を元々省いてしまってあったのか、それとも、スタインベックが意図的に神の名を省いたのか、そのいずれかであろう。そのいずれであるかは不明だが、そのいずれであるにせよ、作者にとっては、神は「アンノウン」であるほうが都合がよかったことは確かである。作品名はアテネ

の人々の神から来ているのではないと言い切るのは、あるいは作者の方便でもありえただろう。その表現の近似からすれば、作者の頭の中にあったものが、使徒パウロの目にした TO THE UNKNOWN GOD でなかった筈はないとも思われる。作者の韜晦がそこにあると読むことが出来る。

古代ギリシア人の神とバラモン教の神とを、そのどちらも身元不明に作り上げ、いずれがどの神とも判らないように細工した後で、両方の神を何とも判らない一つの神に仕立てて作品の中心に据える。作者が選んでこのように仕組んだということは、この作品に籠められた異教性を、つまり、作者の中にある異教性を明示している。

作者は、この意図をより一層明確にするために、作品の主人公とその次兄とを対立した立場に置いてみせる。次兄なる人物は、キリスト者の野外集会へ積極的に参加する典型的なキリスト者である。ところが、主人公はそういうことは無く、却って樹木を信仰し、豊穣を願って、何事にも限りない交媾を求める。主人公はカトリックの神父とも相容れない。旧教と新教のいずれたるとを問わず、主人公にはキリスト者としての伝統的な神に祈る道は残されていない。ヒラヌヤ・ガルバの歌を捧げる人々やアテネの人々と同じように、作品の主人公は異教の人である。

ところが、ここに全く予測も出来かねることのように、異教の人に違いないこの主人公に、作家はキリストの相貌を与える。新妻にとってのこの人物、降雨を神に祈るべしと神父に迫るこの人物、ユダヤの民に習うかのように、あるいはユダヤの民を越えるかのように、自らの肉体を自然神に犠牲として捧げるこの人物に、作者はキリストの相貌を与える。「新しいキリスト」と作者は書いている。

正統なキリスト者から見れば、明らかな異神の信者である人物、地獄に落ちる筈の人物に、「新しいキリスト」の映像が作者の手で与えられる。

作者がバラモン教の讃歌を掲げ、ヘレニズムの神をひそかに持ち込み、異神への道を明らかに歩むさなかに、事は一転して、キリストが登場する。新しいキリストの誕生、イエスの蘇りとなる。

異神を求める作者が、その作品名にも拘わらず、なぜバラモン教の神へ走らず、アテネの人々の神に傾かず、「新しい」とは言え、「キリスト」へ傾いてしまうのか。あるいは、後年老子を引合いに出して賛同を示しながら、やはりそれも稔らないのは、なぜなのか。

これこそが信仰の伝統の根強さというものだろう。伝統のキリスト信仰が既に崩壊しようとする時代にあって、自分では異神を求めながらも、いざ異神に救いを求めるとなれば、作者の前へ現れるのは、バラモンの神でもない、古代ギリシア人の神でもない、中国人の道教の神でもない。結局はイエス・キリストに舞い戻ってしまうのだ。

このことは『怒の葡萄』*The Grapes of Wrath*（一九三九）でも同じである。既に説教師であることを放棄し、イエスの道を棄教した筈の男は、貧しい者たちの救済に加担挺身するうちに、やはり新しいキリストになって行く。『知られざる神に捧ぐ』の場合と同じように、『怒の葡萄』でも、男はその外貌までがキリストの相貌を与えられる。

ジョン・スタインベックに内在する二元論は、作家としての登場以来終生変ることなく続いた。作者は、あるいはキリスト者の流から脱出し、異神の世界に身を置いて生を享受したいと願い続けたのかもしれない。然し、それは最終的には叶えられなかった。異神を求め、異神に生きようとしながら、変則の形でではあったが、その度ごとにキリスト者としての伝統の信仰へ引戻されて行った。ジョン・スタインベックの中にキリスト教信仰の伝統というものが持つ根強さを見出さずにはいられない。

『知られざる神に捧ぐ』の「新しいキリスト」が、『怒の葡萄』のそれと違っている所は、前者が家父長であり、キリストよりもはるかに古い、イスラエルの族長アブラハムの面影を宿している点である。

『欽定英語訳聖書』がスタインベックの少年の日の受読書だったことはよく知られている。

では、あの厖大な書物のうち、どこがスタインベックと一番かかわりがあるのだろうか。

それは、この作家にある原始性の礼讃から当然であるかもしれないが、『創世記』と『出エジプト記』が作者の好みだったと思われる。作品の中に家父長が現れる時、男はイスラエルの族長の相貌を帯びて来る。一口に『聖書』と言っても、スタインベックと『新約聖書』との結び付きは薄い。作者は人間の原初の信仰の姿に共感を持っている。それは、原初の信仰の中にある人間の露な姿を、そこにある素朴な混沌を、作者がこれこそ信仰の原点であると読み取ったからだろう。『新約聖書』が作者の前に登場してくるのは、「新しいキリスト」像を必要とする場合にである。長い信仰の歴史の中で、もし救いを求めるとなれば、それは「蘇り」でなければならないし、新しい救いを求めるとなれば、どうしても「新しいキリスト」ということになる。「新しい」という言葉の中には、新約の時代ではなく、イスラエルの民が原初に考えていたような、信仰としての形をなす以前の、人間の慾望や願いを露にしている混沌の世界への回帰という意味が含まれている。

こうした原初の人間の慾望や願いをそのまま内蔵しているのが、古代ギリシアの神々であり、バラモンの神々である。もしそれに類するものをキリスト教に求めるとすれば、『創世記』や『出エジプト記』に求めるほかなかったのだろう。

『知られざる神に捧ぐ』の主人公が、エデンを期待して東部から西部へ移住するのは、『エデンの東』*East of Eden*（一九五二）での試みの先駆である。この作品は、後年の『エデンの東』の原型を含んでいる。作者の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中で、カリフォルニアはアメリカ合衆国のエデンに擬せられている。

作者は西部へ去って行く主人公に祝福を与えるにあたり、『創世記』第二十四章第二節でのアブラハムまがいの事を主人公の父親に行わせる。即ち、父親はおのれの股間へ息子の片手を入れさせる。これは、アブラハムが **Put, I pray thee, thy hand under my thigh:** と言って、僕(しもべ)に宣誓させた古事を踏んでいる。やがてカリフォルニアへ新天地を求め移住した主人公は、イスラエルの民の所為を次々に踏むことになる。それは物語の展開に詳しい。

作者が志向する異教は、その異教性を少しでも明確な形で定着させようとすれば『旧約聖書』の原点へ戻るほかなかった。このようにして、ジョン・スタインベックの二元論は、時には棄教から反逆へと走り、また時には新約を遠く過去へさかのぼり、伝承による宇宙創造と生命誕生の世界へと帰って行く。こうした点について、もつれる糸を作者がどこまで意識していたのか、もつれる糸をどのようにほぐし、使い分けていたのか。それは作品を通して読み取るしかない。

ジョン・スタインベックの異教性が最も端的に表れているのは、その樹木信仰にある。作品では、『知られざる神に捧ぐ』のオーク、『チャーリーとの旅』*Travels with Charley in search of America*（一九六二）のセコイアが、この点では特に大きい位置を占めている。

スタインベックがオークにかけた願いは、ケルト人がオークに託した土と豊穣と家畜の繁殖への願いと同じである。作者は自分の中にあるケルト人としての血を意識して、敢てオークを作品へ取込んだのかもしれない。

もっとも、オークが重んじられていたのはケルト人の間でだけではない。

古代ギリシア人は、オークをあらゆる樹木の元祖と見なし、オークが地下と天上の両世界を支配しており、神

の象徴であると考えていた。[6]

この木は『欽定英語訳聖書』では「オーク」と訳され、日本語訳では「テレビンの木」「かし」となっている。*The New English Bible* では the terebinths, the terebinth-tree, the oak と英語訳されていて、「テレビンの木」は「オーク」と同じだと考えられている。

オークは『旧約聖書』に登場して来る。今日では絶滅に近いが、元来はパレスチナに沢山あった木で、「聖所」に関係して現れることが多い。巨木になれば、その堂々とした幹、太い枝がつくる緑陰からして、壮厳な感を見る人に与え、力、保護、永遠性などを象徴すると考えられている。

オークは「ぶな科」(Fagaceae) の「こなら属」(Quercus) に属する。北半球の温帯、暖帯、亜熱帯に分布していて、「常緑カシ類」と「落葉カシ類」に分類することが出来る。上原敬二氏は、その浩瀚な『樹木大図説』の第一巻で、多種類の「こなら属」を詳説しているばかりか、世界の名木から方言にいたるまで、まさに学問と好事の両面を兼ねた、驚異の知識を披露している。[7]

オークの登場は、スタインベックの『旧約聖書』好みと符合している。

この木が「聖所」という意味を越えて、神そのものとなる時、スタインベックの異神への志向は明白になって来る。作品の主人公は、この木に犠牲を捧げ、繁殖への祈願をする。あるいは、わが初子をこの木に捧げようとする。このような行為は、イスラエルの民がオークにした所為とは異質な意味を持ち、オークはもはや神の宿る所ではなく、神そのもの、御神体となる。典型的キリスト者である次兄が、主人公の所為を偶像崇拝として難詰し、遂にはこの木を枯死させるという行為に出るのは、作者の中にある樹木信仰が『旧約聖書』のオークの役割から足を踏みはずし、異教の世界へ踏み込んだことを語っている。

オークのほかにも、この作品には松林の巨岩など、巨岩信仰、自然神信仰が明白に打ち出されている。これを単に作品構成上の一つの大道具という意味でだけ取ってはなるまい。それは、オークにしろ巨岩にしろ、それが主人公の限りない交媾への慾望と通じ合っているからである。

セコイアについては嘗て拙書『スタインベックの世界――〈怒りの葡萄〉と〈エデンの東〉』[8]でこれを論じたことがあるから、ここで再び喋々することは控える。

作者がセコイアに読んだ意味は、『知られざる神に捧ぐ』のオークと並び、人間史以前の世界への讃仰である。それは、神以前と言った感さえある。象徴という点で、オークとセコイアは同じ意味を持つ。

樹木信仰よりも更に作者の異教性を露にするものは、作者が示す男女の慾望の肯定である。『怒の葡萄』が批判的になった理由の一つは、そこに示されている作者の性の肯定、無遠慮な性の描写にある。『知られざる神に捧ぐ』は、この点でも先駆的作品と言える。

作者は先ず主人公に限りない慾情の発露を許す。大地におのれの体を打ちつけ、大地を女と見たて、濡れた草を女の髪に見たて交媾を迫る男。やまももの大枝を見ては、男の肉体のうねりを思い浮べる男。雌牛への交尾を雄牛にけしかけて声を荒げる男。これらは全て、主人公の父親が死にのぞんで言ったこと、即ち、世の中の万事は男女の交媾に尽きるという、その言葉を地で行ったことになる。

ジョン・スタインベックの性行為は、ウォルト・ホイットマンが『草の葉』の「アダムの子供たち」で歌ったほどに楽天的ではないが、それは両者が置かれた時代の差でもある。開放的という点では、両者は符合している。

隠微な形での性行為の描写にも、この作品は事欠かない。

例えば、2の最後に、一本の鋭い黒い松の木が円い月を突き刺す情景がある。円い月は女の性器である。黒く尖った松の木は男の性器である。尖った松が月を突き刺す。ここには、繁殖豊穣への願いが託されている。

あるいはまた、新婚夫婦が結婚式を挙げた後、峠を縫ってわが家へ進む場面がある。峠は現実の峠でもあるが、また女の性器でもある。初て通るこの峠におびえる花嫁は、初交におびえる花嫁である。馬車を降り、花嫁の手を引いて峠を越える花婿。通る前は恐かったが、通り抜けてしまえば、その先には明るい世界が見えて来るという描写。これは全て新婚夫婦の交媾の描写である。作者は、ここに泡立ち流れる激流を配置し、ごつごつした一本石を激流に立たせる。激流は女の流である。そこへ立つ一本石は男根である。狭い峠を抜けるに際して、女の性器の内部と男根とを眼下に見ながら、二人は峠を越える。これは新婚夫婦の間のことだから、交媾自体が神への反逆だとは言えない。とは言え、隠微にせよ、それを文字に定着させるということになれば、創作者としてそれだけの覚悟も確信も必要だった筈である。

破戒の場面としては、次の二つが構えられている。

その一つは、一家の末弟がインディアンの妻を盗む場面である。これには明細図は描かれていない。興味深いのは、この遊隋な男の行状ではなくて、この男に喜んで反応する女たちの取扱いである。女の慾情は直接描かれてはいないが、女が進んで慾情に身を任せていることは確かで、そこに作者の女性観を垣間見ることが出来る。男にも罪の意識は無いが、女には尚更罪の意識のかけらさえも無く、女は間男との交媾を享受している。『創世記』のエバもそうだったが、スタインベックの女も、こういう際には導かれる者ではなく、導く者になることが出来る。堕罪は女から来る。

もう一つは、長兄の妻が主人公の渇望を進んで吸い取る場面である。これは、峠での新婚夫婦の交媾と並ん

で、スタインベック文学の性描写の白眉の一つだろう。有夫のこの女は、進んで脱ぎ、進んで男に迫る。男の渇望を知って、自ら体を提供し、男の失意渇望を吸い取る。女が直接吸い取るのは男の慾情であるが、またそれによって男の心の痛苦をも吸い取ることになる。肉体の救済が精神の救済にもなることの例で、スタインベック文学では男女の交媾はこのように形而下から形而上へと意味が転化して行くことがある。つまり、そこにあるのは肉と霊の合一であり、男と女はこのことのために存在するということである。この場面では、有夫の女と、妻を失った主人公とは、限りない交媾の悦楽にひたり、互に慰藉を認め合う。これを描くスタインベックには、破戒の意識は露ほども無い。

『知られざる神に捧ぐ』は、言わば全篇これ交媾の書である。そのどこを開いても、男の慾情に満ち満ちている。そして、女も常にそれを受け容れ、吸収する用意がある。それ故、見ようによっては、これは破戒の書であり、異教の書である。

スタインベックは作家としての出発にあたり、先ず「緑の婦人」が彼の文学に宿ることを願い、異神の世界を最初から志向した。このことは生涯にわたって貫かれている。

若さの旺溢するこの作品は、余りに多くの素材を抱え込んだ作品である。作者が求める異神一つにしても、それは多方面に表されている。これをもっと絞り込み、簡素な素材に限定して書くこともありえただろう。然し、作者の溢れる意慾は、省くことよりは盛り込む方へ走った。それ故、ここには殆ど慾情の垂れ流しというような評言を当てはめることも出来る。それを非とするよりも、それこそが作者の若さであり、創作慾であったとして、これを受け容れるべきだろう。

まことに、この作家の初期の作品には、後々の開花の蕾が幾つも含まれている。異神を描く若き作家の筆に

は、牧歌もある、叙情もある、耽美もある、エデンを探し求める西部開拓者の残映もある、その失意もある、伝統派の信仰への反逆もある、また、反逆の限界もある、ケルト民族の血への回帰もある、生態学への共感の芽もある、アメリカ合衆国文明史への作家自身の位置付けへの萌芽もある。

こうした様々な要素を孕み、それらを未分化のまま抱え込んでいるこの作品は、一人の優れた作家の誕生を予兆している。この作品の出版は、作者に名も富ももたらさなかったにしても、ここに溢れている創作慾と多様な要素とは、異神を求めての旅立ちにあたり、これから為す所ある筈の作家を暗々裡に約束している。

註

(1) Elaine Steinbeck and Robert Wallsten, eds. *Steinbeck: A Life in Letters* (New York: The Viking Press, 1975) 八十七ページ。一九三三年八月九日のカール・ウィルヘルムソン宛の手紙で、スタインベックは、自分は写実主義の手腕をさして備えてはおらず、また、写実主義を信仰してもいない、確信もしていない、と述べている。作者が自身の文学にある空想、幻想の要素を早くから知っていたことを示す。また、以下の註(3)のジャクソン・ベンソンは、その百十四ページで、『金の杯』を「ファントム・アレゴリ」であるとしている。

(2) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1958) 三十八ページ。

(3) Jackson J. Benson, *The True Adventures of John Steinbeck: Writer* (London: Heinemann, 1984) 百九ページ、百十ページ、百三十九ページ、百四十ページ等で、その由来、経緯、成長などが詳しく追及されている。

(4) 同書百三十九～百四十ページ。

(5) *Steinbeck: A Life in Letters* 六十六ページ。

(6) Sir James George Frazer, *The Golden Bough, A Study in Magic and Religion:* Abridged Edition (London: Macmillan, 1925) 第九章。及び、「UP通信」10（一九八四年百四十四号、東京大学出版会）所収、小野泰博「オーク

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com